『お水でアート』

第6学年2学級63名

平成20年7月
文京区立誠之小学校
辻　政博教諭の授業

1、はじめに

7月の蒸し暑い図工室に鈴木英雄さんをはじめとするＡＰＡのスタッフが図工室にやってきた。「写真を使った授業」を行うためである。

この蒸し暑さ中、どんな授業を行うが思案した結果、「水」を主材料とした「造形遊び」と「写真」をからませて題材を考えた。

2、行為や状態の作品化

図工の活動の領域に「造形遊び」というのがある。簡単に言うと様々な材料にかかわるなかで、表し方を考え、自分のイメージを具性化していく造形活動である。そこでは活動のプロセスが大切にされる。自分のからだで感じ、感覚や思考を働かせて、イメージを豊かにしていくものである。よって、絵などと比べると、結果としての作品という形になりにくいものだ。

そこで、「写真」とからませることで、また、異なった意味が発生してくると考えた。

子どもに与えたポイントは次のようなものである。

3、「お水でアート」

「①水の形はどんな形？②水の色はどんな色？③それは、どこにあるの？さらに、その活動を4枚の写真に撮る」である。

子ども達は、授業があまるやいなや動き始めた。あまり躊躇する様子はない。いろいろなカップや瓶、鍋、絵の具を活用しながら、それを机上、教室、廊下、裏庭などの場所で、様々な試行錯誤を繰り返し始めた。低学年や中学年の児童なら、色水をつくることや積極的に活動することが適正であるが、6年生の児童ともなると色合いや組み合わせ、場所や周囲との関係などより複雑な関係を考えながら、活動している。さらに、その活動を写真で撮ることを意識しながら行っている。

写真の機能を考えると、①瞬間を切り取る。②フレームで切り取る。③視点で切り取る。というようなことが考えられるが、児童にとって、こうした写真の機能が活動に加味されて、より視覚的に考えながら活動に取り組むことができたと考えられた。

4、アンケートから

授業後のアンケートでは、63名中、①とても楽しかった59名、②まあまあ楽しかった4名、③4のあまり楽しくなかった、楽しくなかった が0名と全員の児童が楽しめたことがわかった。

また、感想の記述では、「いつも身近にある水を使って工夫して撮ることができた」「新鮮で写真の面白さに気づいた」「もっとちがうものも撮ってみたい」「たくさんの見方、考え方で授業ができてよかった」…水や写真を使った授業の楽しさや意味を積極的に支持する意見が多かった。

現在のヴィジュアル・カルチャーが蔓延する世界で、「写真」を使った授業を行うことは、不可欠かも知れない。何故なら、こうした体験は、ヴィジュアルなコミュニケーションを楽しむとともに、その表現に対するより主体的な批評性のようなものを児童自身が身につけていくことにつながるからである。それは授業を行った子ども達の方がはっきりと感じているようである。

辻 政博教諭
写真／鈴木英雄 ASHI 85・4ポ・7mm×3ヶ行